

9/10

September / October
2025

Vol.173

紀尾井 だより

Kiei News



紀尾井ホール室内管弦楽団
第145回 定期演奏会

響き合う和と洋

「光」を伝える舞を探して

中村吉太郎、金沢公演に向けて能登半島・珠洲市を訪問

連載

「邦楽を楽しもう！」

邦楽のレシピ『尺八』

楽器編3

「クラシック音楽のテーマに基づく3話」
ブラームスの「交響曲第1番」をめぐる3つの話



日本製鉄 紀尾井ホール

紀尾井ホール室内管弦楽団 第145回定期演奏会

幅広いレパートリーを持つ

ウオードが披露するオール「B」プログラム

紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)今シーズン最後となる第145回定期演奏会は、英国の指揮者ダンカン・ウオードが初登場します。ウオードは、1989年生まれの36歳。マンチェスターの王立ブーザン音楽大学で学び、サイモン・ラトルの推薦で、ベルリン・フィル・カラヤン・アカデミーの初代指揮者を務めました。2015年ザルツブルク音楽祭、17年ルツェルン音楽祭、22年メトロポリタン歌劇場にデビューするなど順調にキャリアを積んでいます。レパートリーがとて広く、レ・シエクルなどの古楽器アンサンブルから、アンサンブル・アンテルコンテンポランなどの現代音楽のスペシャリストたちと共演するなど活動も多岐にわたっています。今回は、作曲家の頭文字がすべて「B」で始まるブリテン、ベルク、ブラームスのオール「B」プログラム。前半

ラトルが見出したイギリスの俊英、ウオード。 そして高潔な芸術性と多才さを兼ね備えた名手、 ムローヴァが初登場

では、20世紀を代表する二人の作曲家の傑作が披露されます。

20世紀を代表するイギリスの作曲家 ベンジャミン・ブリテン

英国の音楽家にとって、ベンジャミン・ブリテン(1913～1976)は特別な存在の作曲家です。その音楽は独特で、渋さと奥深さゆえに、私たち日本人にはすぐに理解できない部分もありますが、彼らにとって、言葉で説明しなくても感覚的に共感できる、腑に落ちる音楽のようです。

ブリテンは、歌劇《ピーター・グライムズ》の成功で一夜にして英国を代表する作曲家としての地位を確立しました。「4つの海の間奏曲」は、オペラの6つの間奏曲から4曲を選び、それぞれタイトルを付けて演奏会用に編まれた組曲です。漁師ピーター! グライムズは、粗野な性格ゆえに孤立し、周囲との軋轢が悲劇を生みます。「夜明け」「日曜

の朝」「月の光」「嵐」とタイトルが付いた4曲は、静かな嵐のときもあれば、波が砕け、荒れ狂うときもあり、海のさまざまな表情が音楽で描写されます。それは同時にピーターの心模様でもあるわけで、ブリテンのこの独特の世界をマエストロがどのように表現するのか注目したいところです。

ムローヴァが日本で初披露する

ベルクのレクイエム(ヴァイオリン協奏曲)

続いては、今年生誕140年、没後90年の新ウィーン楽派の作曲家アルバン・ベルク(1885～1935)の《ヴァイオリン協奏曲》です。「ある天使の思い出に」と献辞が付けられたこの曲は、18歳の若さで世を去ったマノン(マラーの妻アルマと再婚した建築家ヴァルター・グロピウスの娘)へのレクイエムとして作曲されました。いつになく仕事が早かったベルクですが、作曲中、体調が思わしくなく、背中にできた腫瘍に悩まされて

いました。完成後の12月24日に敗血症で亡くなってしまう、ベルクが完成させた最後の作品、自身へのレクイエムになりました。

新ウィーン楽派の作曲家という、難解に思われるかもしれませんが、でもこの作品は、数字へのこだわりや楽曲の理知的な組み立ては複雑ではあるものの、ロマンティックな旋律が耳に残ります。シェーンベルク門下のベルクは、12音技法を用いて作曲していますが、協奏曲の基本音列が長3和音と短3和音を含む音列のため、無調と後期

ロマン派の調性感の間を歩き来するような響きが特徴的です。楽曲冒頭の、独奏ヴァイオリンが開放弦で放つソ・レ・ラ・ミの音型には、虚しさ、悲しさ、美しさ、妖しさなどの感情が入り混じり、一瞬にしてベルクの世界へと誘われます。また、ベルクが、第1楽章は「天使のように美しいマノンの思い出」、第2楽章は「マノンの苦しみと死、そして天国への昇天」と示唆した一方で、ベルクの初恋の相手の出身地であるケルンテン地方の民謡が現れたり、第2楽章後半で晩年の恋人

を音楽構造のなかで暗示する仕掛けを用いたり、さらにはバッハのカンタータが引用されるなど、さまざまな角度からスコアを深読みすることも可能です。

ソリストは、KCO初登場、40年にわたり世界のヴァイオリン界を牽引するヴィクトリア・ムローヴァが務めます。モスクワ音楽院で学び、シベリウス国際とチャイコフスキー国際の両コンクールで優勝、1983年の西側への亡命は世界を驚かせました。定期的に来日していますが、彼女がベルクの協奏曲を日本で披

© Simon van Boxtel

露するのは今回が初めてです。すみずみまで磨かれた深みのある美しい音を響かせ、知的なアプローチと揺るぎない確信をもって作品の内奥へと人ついでいくムローヴァの演奏は、聴き手の心を大きく動かすことでしよう。さらに、ベルクの手腕が存分に発揮され、管打楽器が充実した多彩な音色をもつオーケストラ書法を、俊英ウオードがどのようにまとめ上げるのか、期待が高まります。

文／柴辻純子(音楽評論家)



Benjamin La Voega

ヴィクトリア・ムローヴァ

11/21

金
19:00

11/22

土
14:00

紀尾井ホール室内管弦楽団 第145回定期演奏会

会場:東京オペラシティコンサートホール

【出演】 ダンカン・ウォード(指揮)
ヴィクトリア・ムローヴァ(ヴァイオリン)
紀尾井ホール室内管弦楽団

【曲目】 プリテン : 歌劇《ピーター・グライムズ》~4つの海の間奏曲 op.33a
ベルク : ヴァイオリン協奏曲
ブラームス : 交響曲第1番ハ短調 op.68

KCOが初披露するブラームスの交響曲第1番について、P8-9「ブラームスの『交響曲第1番』をめぐる3つの話」で詳しくご紹介しています。あわせてご覧ください。



金沢

「光」を伝える舞を探して

中村孝太郎、金沢公演に向けて能登半島・珠洲市を訪問

10月12日開催の『光 - HIKARI -』(石川県立音楽堂)に出演する歌舞伎俳優の中村孝太郎さんは、インターネットを介して、美術作家の中島伽耶子さんの作品『あかるい家』に出会いました。現地で得られるインスピレーションを大切にしたいという孝太郎さんの強い思いにより、今回の取材となりました。



10/12



14:00

日本製鉄紀尾井ホール&石川県立音楽堂 連携事業
光 - HIKARI -

会場:石川県立音楽堂 邦楽ホール

【出演】 中村孝太郎(舞踊)、杵屋巳三郎(唄)、今藤長龍郎(三味線)、彌勒忠史(カウンターテナー)、曾根麻矢子(チェンバロ) ほか
【曲目】 舞踊「長唄「月」、舞踊「あかるい家」、クープラン：恋のうぐいす、ヘンデル：オンブラ・マイ・フ、舞踊「越後獅子協奏曲」ほか



金沢駅から石川県珠洲市まで車で片道約3時間。「この地域は美意識が高い」と語る中島さんは、珠洲市の光と人々の暮らしの豊かさに思いを巡らせながら、作品制作に取り組んだといいます。『あかるい家』（2021年制作、同年の奥能登国際芸術祭にて展示）に到着して足を踏み入れた瞬間、宍太郎さんはその美しい光に、「すごい、きれい！」と思わず感嘆の声をあげました。

2024年1月に発生した能登半島地震の影響で、地面には亀裂が入り、段差が生じました。扉は新たに作り直されるなど、現在も修復作業が行われていますが、アクリル棒が刺さった屋根瓦は落下することなく、家を守り続けています。

「芸術が家を助けた」と静かに呟いた宍太郎さんは、壁に手を添えてじっと思索にふける場面もあれば、屋外からも家を観察し、中島さんに積極的に質問を投げかけメモを取るなど、真剣なまなざしで作品と向き合っています。この「アクリルと光」という要素を、劇場の舞台でどのように活かすか、二人は熱心に意見を交わしながら検討を重ねていきました。

現地を訪れた後、中島さんは「まずは珠

洲の現状を見てもらいたかった。復興途中の地域の様子や、そこに暮らす人々の生活を知ったうえで、何か一緒にできるほうがきっと良いと思いました」と話します。今回案内した場所で宍太郎さんが共鳴している姿を見て、「作家として尊重していただき、私もその思いにしっかりと応えたい」と、力強く意気込みを語りました。

一方、宍太郎さんは「大変難しいことではありますが、実際に現地を訪れなければわからないことを胸に刻み、直接的ではなく、内側から表現していきたい」と語っています。「芸術作品や土地をもとに、ゼロから舞台を創り上げることは今回が初めてであり、心に深く残る作品を創りたい」と、挑戦への決意を新たにしました。

公演では、互いに同い年の宍太郎さんと中島さんが作り出す新しい舞台作品とともに、二人の創作への思いや珠洲での体験を語り合うトークも予定されています。作品をより深く楽しめるまたとない機会です。今回の訪問が、どのような舞台作品へとつながっていくのか、期待に胸が高鳴ります。

撮影／田川絢輝



地域の方々と言葉を交わす宍太郎さん。外に出ると、足元の芽吹きに目を留め、強い生命力に未来への希望を重ねました。



「公演を、被害を伝える場とするべきか、それとも美しい世界だけを描くべきか。」その間に葛藤する宍太郎さんの姿が印象的でした。



『あかるい家』は、木造家屋の壁や屋根にアクリル棒を貫通させて自然光を取り入れ、星が瞬くような幻想的な空間を生み出す作品です。



時折吹く風が心地よい6月中旬の珠洲市。『あかるい家』の周囲にはケール畑の鮮やかな新緑が広がっていました。





尺八

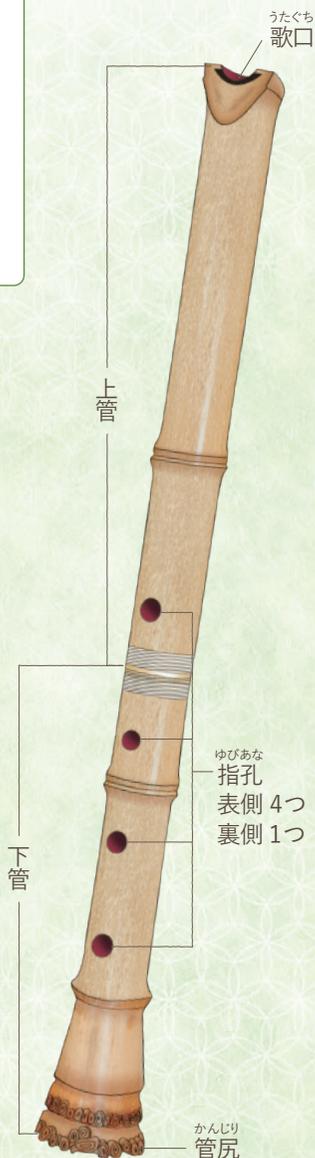
① 倍音を含んだ音色

現在一般的に使用されている尺八の長さは1尺8寸(約54.3cm)。指孔は表に4つ、裏に1つあり、すべての指孔を塞いだ状態で出る「筒音」は「レ」。指孔5つの開閉だけで出せる音階は「レ・ファ・ソ・ラ・ド」、それ以外の音は指孔の開け具合などで出します。音域は通常2オクターブ半、演奏家によっては3オクターブに及ぶこともあります。1尺8寸管から1寸短くすることに半音ずつ高くなり、1寸長くすることに半音ずつ低くなります。

「尺八は5度の倍音がたくさん含まれた音そのものに魅力があり、それを重ねることでコーラスのような独特の美しいハーモニーを出せるなど、可能性を秘めた楽器です」

② 真竹の根っから

尺八の素材は、竹細工などに利用されている真竹です。食用の柔らかい孟宗竹とは異なり、肉厚で頑丈です。竹の生長は非常に早く、真竹の場合2ヵ月くらいで成竹し、3～5年くらいすると繊維の密度が高く硬くなり、それ以降は老化していきます。その老化直前の竹が尺八には最適です。若い竹は硬くなっておらず繊維が収縮してシワが入ることがあるため、掘り起こすタイミングの見極めが重要です。作業の時期は、地下茎に水分を下ろして生長が休止する冬が適期で、寒い時期での厳しい作業となります。掘り起こした竹は火で炙り油を抜き、黄色くなるまで天日にさらし、さらに暗室で3～5年寝かせます。



今回は、日本はもとより世界各地で愛好される尺八をご紹介します。演奏家であり、製管師としても活躍する、東京都狛江市の泉州尺八工房代表 三塚幸彦さんにお話を伺いました。
取材・文／織田麻有佐(邦楽ライター)

③ 製作工程

泉州尺八工房では、油抜きした竹を仕入れて尺八を製作しています。竹の根を管の下端にして、指穴が最初の節と節の間に2つ、次の節間に3つ(表2つ、裏1つ)開けられる竹を選びます。竹はたくさんありますが、その条件に合うものはわずかのことです。

選んだ竹は火で炙り力を加えて真っ直ぐに矯正して、上下を切断、内部の節を抜きます。それを上管と下管に切断して、ホゾというジョイント部分を作製し、指孔を開けます。上管の上部を斜めに切り、硬い素材(アクリル)を入れて歌口うたぐちを成形。そして竹の内部を加工します。エアーリード楽器*である尺八は歌口の形状、指孔の位置や大きさなどが音に大きく影響するため、研究が進められています。

*吹込口に当ててできる気流の渦で音を出す楽器

④ テーパー構造がキモ

クラリネットやフルートなどは内側をテーパー(先細り)構造にすることで音色を豊かにしています。竹は内径が上部から根に向かって細くなるテーパー構造を持っており、この内部の加工が音作りにおいてもっとも重要な工程とのこで、それによって管楽器として完成します。

まず竹の内側を削り、そこに漆、砥粉、石膏、水をまぜたものを塗り込みます。それが固まると少しずつ削ります。「長年やっていると自分自身がセンサーのようになるので、いろいろ吹いて耳で音を確認しながら作業します」。さらに漆を塗って乾かす作業を何度か繰り返して仕上げます。完成まで早くても2ヵ月間くらい要します。

⑤ 自由に愉しむ!

竹の内部に漆と砥粉などを塗り込んだ「地じあり尺八」に対して、竹の内側の節を抜いて指孔を開けただけの「地じ無し尺八」もあります。

「管楽器は内部構造による音なのでそこをきちんと作るべきだと考える人たちと、地無し尺八こそ本当の竹の音だという人たちと両極端です。自分がよいと思ったものをそれぞれが吹く、こんなに自由な楽器はほかにありません。ギターがクラシックギター、フォークギター、エレキギターなどいろいろあるのと同じ感じです」。

尺八の場合、プロの製管師が作った楽器を購入して音楽を楽しむだけでなく、尺八の工具専門店もあり、自ら竹を掘って尺八作りを楽しむ人も多くいます。そこがほかの楽器と大きく異なります。

「確立されたほかの楽器に比べると発展途上の楽器です。楽器も音楽も、誰もが自分で考えて作っていける…それが尺八の面白いところです」



泉州尺八工房

独自の研究と製作によりアマチュアからプロ演奏家まで幅広く信頼を集める。長年培った竹製尺八のノウハウでメタル尺八「AireedX」を開発。世界中どのような条件のもとでも尺八を楽しめることを可能とした。

東京都狛江市岩戸北1-7-15

TEL : 03-3480-2194

<https://shakuhachi.co.jp>

クラシック音楽の
テーマに基づく3話

ブラームスの 「交響曲第1番」を

3 つの話

めぐる

日本でも「ブライチ」などと称され、愛され続ける名曲はいかにして生み出されたか?をめぐる3つのお話です。

1 「交響曲第1番」の 創作の背景

ブラームスは1876年に「交響曲第1番」を完成して初演します。この作品には、交響曲創作史における大きな課題とブラームスの創作における背景がありました。1827年にベートーヴェン、1828年にシューベルトがこの世を去り、古典派以来の交響曲創作が一段階を迎えます。その後、1830年からシューマンが「交響曲第3番(ライン)」を作曲した1850年までが交響曲創作の次の段階で、この時期に

メンデルスゾーンは交響曲第2番から第5番、シュポーアは交響曲第4番から第6番を作曲しています。

その後、交響曲の新しい創作理念を追求したのがリストです。彼は「ファウスト」と「ダンテ」の二つの交響曲で合唱を加えたわけではなく、それまでに男声合唱作品として作曲した「四大元素」を「前奏曲」に、戯曲「タッソー」の序曲を交響詩「タッソー」とするなど、従来の交響曲とは異なる交響詩を創作します。

シューマンを通してベートーヴェンの後継者として世に紹介されたブラームスが目指したのはリストの路線とは異なります。彼は1860年にリストや音楽評論家のブレンデルを批判した抗議文を出しますが、彼が目指したのはリストのような作品ではなく、バッハ、ハイドゥンとベートーヴェンの伝統に基づいた創作でした。

ブラームスが最初に手がけた管弦楽作品は2曲のセレナードです。「セレナード第1番」作品11は彼の管弦楽の表現の原点で、第1楽章ではハイドゥンの「交響曲第104番」の第4楽章の主題を借用し、第2楽章ではベートーヴェンの「交響曲第2番」第3

楽章を模範とし、随所に用いられる模倣対位法は彼のバッハ研究を示しています。このセレナードではホルンが重要な役割を担っていますが、このホルンの表現は「交響曲第1番」や「交響曲第2番」でのホルンの長い独奏に受け継がれています。

2 「交響曲第1番」の 初演稿について

「交響曲第1番」の創作に着手するのは1855年です。1862年に第1楽章を書き上げると彼はクララ・シューマンにピアノで弾いて聞かせています。クララは冒頭部分の楽譜を添えて、ヴァイオリン奏者のヨアヒムに感想を書き送ります。その楽譜には荘重な前奏部分がなく、第38小節から始まっています。作品はその後、少なくとも1876年まで大きな進展は見られませんが、しかし、1870年代に入って弦楽四重奏曲や「ハイドゥンの主題による変奏曲」の創作を手がけるころから、ブラームスは交響曲の完成をおそらく考えていたのでしょう。1855年に最初の創作を開始するその前年に彼は「2台のピアノのためのソナタ」の作曲に着手します。彼はそれを交響

曲への改作を構想しますが、それは頓挫し、代わって「ピアノ協奏曲第1番」として完成します。現在、注目されているのは、交響曲の第1楽章の主要主題と「ピアノ協奏曲第1番」第1楽章の主題との類似性や、協奏曲での長大な二音のオルゲル・プンクトと交響曲でのハ音の連打との関係です。

作品は1876年に入ってからかなり短い期間で作曲が進められました。その際に第1楽章に重々しい前奏が付され、それと対をなす形で第4楽章の序奏が作曲されました。そして第4楽章の序奏に、1868年にクララ・シューマンの誕生日を祝う葉書に書き記した旋律を転用します。また第1楽章ではシューマンの「マンフレッド序曲」との関連も注目されます。ブラームスはシューマンの誕生日のためにこの作品の主題を用いたカノン作曲しており、ブラームスにとって馴染みのある作品でした。



29歳のころのヨハネス・ブラームス
(1862年、カール・アントン・シュルツ)

3

交響曲の構想

ブラームスはこの作品の終盤のところで、指揮を担当するオットー・デッソフやクララ・シューマンに意見を求めています。すでに「ドイツ・レクイエム」の初演で高い声望を得ていたブラームスにとって「交響曲第1番」の初演は非常に緊張をはらんだものであったと思われます。彼はウィーンではなく、南ドイツのカールスルーエでこれを初演したのもその表れです。

初演譜は現在のもとはかなり異なっていました。彼は初演の指揮者のデッソフに中間楽章の簡略化を提案しています。また、ウィーン初演の際に用いられたパート譜の一部をみると、現在の第2楽章とは異なり、また第3楽章や第4楽章でも初演後に何か所か補筆されています。このように、ブラームスはカールスルーエやウィーンでの初演後にさらに推敲を加えて、印刷稿に至りました。彼の創作においてこれほどに推敲や訂正が加えられた作品はなく、最後の段階に至るまで、ブラームスは作品完成に苦吟していたことが資料からうかがい知

ることができます。

作品初演後にクララ・シューマンは作品に対する感想を書き送っています。「私がこの交響曲に関して申し上げたいと思ったことを、お手紙で述べるのは本当になかなか勇気がいることです」という言葉で始まる手紙の中で、「第3楽章の終わりの部分はいつも私にはとても不満です。短すぎるからです」と述べ、第4楽章のコードダについてこのようにしためています。「音楽的に見てプレストの部分は、その前の比類なく高い感動と比べると期待はずれです。このプレストの部分では高揚は、内的な運動よりもむしろ外的な運動によるように思えます。」そしてこの手紙を次の言葉で締めくくります。「親愛なるヨハネス、お許し下さい。私はあなたには率直なものですから。」クララ・シューマンの手柄を彷彿とさせる文面です。

文／西原稔

(桐朋学園大学名誉教授)

11/21

19:00

11/22

14:00

紀尾井ホール室内管弦楽団
第145回定期演奏会

会場:東京オペラシティコンサートホール

詳しくはP2・3でご紹介しています。あわせてご覧ください。

紀尾井サポートシステム会員 (五十音順・「株式会社」等表記及び敬称略)

- 《特別協賛会員》住友商事／日鉄ソリューションズ／三井不動産／三井物産／三菱商事／三菱地所
- 《みやび会員》伊藤忠商事／大島造船所／大林組／鹿島建設／商船三井／菅原／住友商事／日本郵船／丸紅／三井住友銀行／三井住友信託銀行／三井不動産／三井物産／三菱商事／三菱地所／メタルワン
ほか匿名2社
- 《ひびき会員》オカムラ／高砂熱学工業／竹中工務店／東京きらぼしフィナンシャルグループ／みずほ証券／山下設計
- 《みどり会員》青鬼運送／赤坂維新號／今治造船／ヴォートル／エケーディ／荏原冷熱システム／ザ・キャピトルホテル 東急／三協／清水建設／上智大学／大成建設／千代田商事／テイスト・ライフ／東京ガーデンテラス紀尾井町／東芝ライテック／永田音響設計／ニュー・オータニ／ハウス食品グループ本社／パナソニック／三菱UFJ銀行／三菱UFJ信託銀行／三菱UFJモルガン・スタンレー証券／ミュージション／明治座舞台／ヤマハサウンドシステム／ワークショップ21
- 《あおい会員》青木陽介／浅沼雄二／浅見 恵／石崎智代／石田昌也／磯部治生／伊藤真理子／上野真志／馬屋原貴行／江幡 淳／大内裕子／大垣尚司／大久保なほ子／太田清史／小川 保／小倉 ヒロ・ミハエル／角田実内愛／糟谷敏秀／片山國正／片山能輔／加藤巻恵／加藤優一／金井俊樹／神川典久／川口祥代／菊池恒雄／木谷 昭／楠野貞夫／栗山信子／河野紗妃／小坂部恵子／小林雅紀／斎藤公善／坂詰貴司／坂根和子／佐久間庸行／佐野千紘／佐部いく子／柴田雅美／清水 正／清水多美子／清水康子／白土英明／新角卓也／鈴木順一／鈴木 幸／鈴木 亮／高下謹彦／高杉哲夫／田中 進／田頭亜里／中尾武彦／中塚一雄／中西達郎／中村健司／中村昌子／中山昌樹／原田清朗／藤村行俊／北條哲也／堀川将史／牧本恵美子／松枝 力／松尾芳樹／真野美千代／丸井正樹／水口美輝／蓑輪永世／宮島正次／宮田宜子／宮武悦子／宮原 薫／宮本信幸／ミューズ M／村上喜代次／村上敏子／持留宗一郎／茂手木優輝／八木一夫／八木晶子／矢田部靖子／山内寿実／山口 彰／山口 聡／横手 聡／吉田季光／渡邊一夫／渡辺由香里
ほか匿名43名 計239口 (2025年8月1日現在)

特別支援会員 (五十音順・「株式会社」等表記略)

- アステック入江／五十鈴／NSユナイテッド海運／NSユナイテッド内航海運／エヌエスリース／エヌテック／王子製鉄／大阪製鐵／九葉工業／草野産業／黒崎播磨／合同製鐵／鴻池運輸／小松シヤリング／山九／産業振興／三見金属工業／サンユウ／三洋海運／山陽特殊製鋼／ジオスター／新日本電工／スガテック／大同特殊鋼／大和製罐／高砂鐵工／高田工業所／鶴見鋼管／テツゲン／電機資材／東海鋼材工業／東邦シートフレーム／トピー工業／日亜鋼業／日鉄SGワイヤ／日鉄エンジニアリング／日鉄片倉鋼管／日鉄環境／日鉄ケミカル&マテリアル／日鉄建材／日鉄鈹業／日鉄工材／日鉄鋼板／日鉄興和不動産／日鉄スチール／日鉄ステンレス鋼管／日鉄精圧品／日鉄精密加工／日鉄ソリューションズ／日鉄テクノロジー／日鉄テックスエンジ／日鉄ドラム／日鉄物産／日鉄物流／日鉄プロセッシング／日鉄保険サービス／日鉄ポルテン／日鉄溶接工業／日鉄レールウェイツノス／日本金属／日本触媒／濱田重工／富士鉄鋼センター／不動テトラ／幕張テクノガーデン／三島光産／宮崎精鋼／吉川工業／ワコースチール
日本製鉄 (2025年8月1日現在)

編集後記

7月末で年内すべての演奏会を終え、館内の備品や資料はしばらく倉庫へ引越しです。30年の間にこれだけの演奏会が開催されたのかと、公演記録資料を見返して、改めてホールを愛してくださる皆さまへ感謝の気持ちでいっぱいになりました。綺麗になったホールに戻るときのことを楽しみにしながら、今年後半も、東京都内や全国のホールで皆さまのご来場をお待ちしております！



天皇陛下がご来場されました

6月1日(日)開催の「ヴィオラスペース2025・第6回東京国際ヴィオラコンクール入賞記念コンサート」(主催:東京国際ヴィオラコンクール実行委員会)に、天皇陛下がご来場され、演奏会を鑑賞されました。

第35回日本製鉄音楽賞 受賞記念コンサートを開催しました

前半では、**特別賞**を受賞された故・宮澤敏夫さんのご生前のご活躍をご紹介します。

宮澤さんは、大阪フィルハーモニー交響楽団にコントラバス奏者として入団され、その後、財政的に困難な状況にあった同楽団の事務局長に就任し、見事に再建を果たされました。さらに、経営難に陥っていた札幌交響楽団や富士山静岡交響楽団の立て直しにも尽力され、いずれも楽団としての発展へと導くなど、長年により日本のオーケストラ界の発展に多大な貢献をされました。

そのほかにも、日本演奏連盟事務局長や伊那文化会館館長などを歴任され、木曾音楽祭をはじめとする地方の音楽祭の運営にも深く関わるなど、日本の音楽界全体の振興に尽力されました。

後半では、**フレッシュアーティスト賞**を受賞された上野通明さん(チェロ)によるミニコンサートが行われました。

レーガーの《無伴奏組曲第2番》で幕を開けると、変幻自在でまるで百面相のように多彩で表現が豊かな演奏で、会場全体が“上野ワールド”に引き込まれていくようでした。続いて、ピアノに北村朋幹さんを迎え、 Hindemith の《カプリッチョ》、Bethoven の《チェロ・ソナタ第1番》が演奏されました。互いを信頼し合い、息のあった二人の演奏から、本当に音楽を楽しんでいることが伝わってきて、聴衆も心が躍るような至福のひとつときとなりました。



フォトレポート

5.8(木) 響き合う和と洋 和楽器と紀尾井ホール室内管弦楽団 近現代ニッポン音楽の歩みを聴く



日本音楽が西洋音楽と出会い、受容した過程をお聴きいただきました。後半では復元演奏した「三味線協奏曲」で、KCOは初めて和楽器と共演し、新たな一面を見せました。

◎ 堀田力丸

5.16(金) 三菱地所 presents 紀尾井 明日への扉 第44回 瀬千恵美(クラリネット)

協賛：三菱地所株式会社

アンケートより

クラリネットの新しい演奏家到来を待ちわびていた。瀬さんは既に演奏家としての存在感があり、クラリネットの可能性を最大限に出してくれたと思う。



◎ 逢坂純

6.10(火) 邦楽 明日への扉 第8回 日吉章吾(平家・胡弓・地歌歌曲)

協力：森永製菓株式会社



アンケートより

プログラムの多様な面白さ。真摯な演奏と音色の良さ。とくに「残月」は素晴らしく、後半は圧巻でした。

◎ 堀田力丸

6.11(水) グザヴィエ・ドゥ・メストレ ハープ・リサイタル

2019年に続く今回のリサイタルではハープのソロに加え、日本の若き実力者たちとの共演で、アンサンブルでのハープの魅力もたっぷり聴かせてくれました。



◎ 武藤章

日本製鉄 紀尾井ホール

公益財団法人 日本製鉄文化財団
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号
TEL. 03-5276-4500(代表) FAX. 03-5276-4527

主催公演の最新情報や
チケットのご予約はウェブサイトで
<https://kioihall.jp>

